



### 【素晴らしい出会い③】

私たちにあまり馴染みのない南アジアの国、  
バングラデシュをご紹介します。

## バングラデシュに恋して

vol.9



ダッカ大学はバングラデシュの名門大学でそこで過ごした時間はかけがえのない強烈な思い出として私の中に残っています。過密と喧噪、そして埃の街ダッカのど真ん中にありながら広大なキャンパスと緑の木々、由緒溢れる校舎、知的な学生達：あちらこちらで学生集会が行われ、1970年代当時の日本の学生運動やアメリカの反戦運動を彷彿とさせます。そこで私は一人の学生に声を掛けられ、導かれるようにストリートチルドレン(孤児)教室の先生になりました。彼らは生まれながらの孤児だったり、親に虐待され家を飛び出してきたりと生い立ちは様々でしたが皆様に苛酷な運命を背負い、一度も学校に通ったことが無い子ども達も沢山いました。外国人の私は彼らには珍しく、

初日から大歓迎で迎えてくれました。算数や英語、時にはギターを弾いたり、歌ったり絵を描いたり、日本語を教えたりしました。日本語の授業はとりわけ人気があり、耳、目、口…など彼らは一発で覚えてしまいます。私に会う時「こんにちはー」と手を挙げる子まで出現しました。ある日、ダッカでは珍しく12月の寒い雨がしとしと降る日、

生徒の中ではお兄さん格のロメオが「明日からもうここに来れない。今までありがとう」とバラの花をくれました。私は急いで財布の中から五円玉を取り出し紐で即興のペンダントを作りロメオの首にかけてあげました。ロメオは何度も五円玉を握りしめ首を2、3度傾げるとサンキューと言って速足で行ってしまいました。冬なのに薄っぺらな服を着たロメオの後ろ姿は本当にか細く、これから先、彼にどんな人生が待っているのだろうと胸が締めつけられるようでした。その後、青空教室近辺でロメオの姿を見ることはありませんでしたが、風の噂で彼が戦闘員になったことを知り五円ペンダントがどうか彼の御守りになってくれることを毎日願っています。



鶴田 素子さん

八代市のローズマリー紅茶店オーナー。50歳で大学院に再入学し、開発経済学を専攻。途上国の貧困削減のためフェアトレードを推進する。

ご感想お待ちしております!

info@uki-pre.net